

主体的なからだの復興  
野口晴哉の思想から考える

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター

本論文では、野口整体を考案した、野口晴哉という人物の思想に触れながら、他に依存しないからだを通した人間形成の意義について考察する。

第1章では、からだと脳の関係について考えるが、近年の脳優位社会のなかで、からは脳の従属物となり、その主体性を失ったためにおこっている問題について論じる。次に、からだを独占してきた近代医療について、イヴァン・イリイチの『脱病院化社会』をもとに考察する。その際、死、病、痛みを遠ざけ、「個人が現実直面し、自己の価値を表現し、避けがたくしかもしばしば癒しきれない痛み、損傷、老衰、死を受け入れる能力を駄目にして」(イリイチ)きた私たち自身と、デカルトの二元論から未だに脱出できない医療体制が、いかにからだを疎外してきたのかを振りかえる。イリイチは、からの主体性を取り戻すのは専門家ではなく、非専門家による連帯と、相互的にからだに問い続ける姿勢が重要だと説いた。私はこのイリイチの問題提起を受けとめ、「相互的にからの主体性を目指す」人間形成のあり方を考察する。

さらに、からだに関して、これまでどのような試みがなされてきたのか、その歴史を追っていく。まず欧米で発展してきた「ボディワーク」の歴史を検討し、さらに近代日本で、健康概念がどのように変化したのか、日本の健康史について言及する。ここでは、現在日本に入ってきている西洋ワークの多くが商品化され、安易な「癒し」商品に転換していることと、ワークを扱う指導者たちにおいて、からは簡単に依存的になるという認識が薄い点を問題とし、西洋的なからの感覚と東洋的なからの感覚の違いを比較しながら、日本人がからの復興のために、捉えるべき課題を検討する。その上で、「型」と「稽古」に注目し、からだを通した人間形成と、からだを響かせることについて考察する。

第2章では、野口晴哉の生い立ちと、「からは治すものではなく勝手に治っていくもの」という彼の信念、野口の主体的なからだへの信頼感というものを手がかりに、「相互的なからだ」について取り上げる。また野口の活動の柱となった「活元運動法」と「愉気法」、そして「天心」というこころのあり方を考察し、「からだを育む」野口の教育観にも言及する。本章の最後では、現在商品化している一部の「癒し」との違いを検討しながら、野口が目指した「整体」と「天心」から、主体的なからだと生き方を吟味する。

第3章では、からだに共通するものとして、避けては通れない「死」と「加齢」の問題を、野口がどう見ていたのか。また「死」をイメージすることと、からの体験からしか得られない、未来や過去を想像する能力が、野口のいう「全生」の思想と、どのようにつながっているのかを検討する。そして、からだを柔軟にしておくことは、日常の危険から自分を守ることにつながっていくが、そのような「柔軟なからだ」が、時間軸を越えた「変化するからだ」となり、あらゆる危険を察知する能力(命のレベル)を高める可能性があ

る、ということについて論じる。最後に、命のレベルを上げるために、野口が提唱した、錐体外路系（意識しない動きを司る領域）を鍛える「活元運動法」を実践することで、夢で行われるような調節も、からだが自由に、いつでも行うことができるようになり、そのような「夢見のからだ」が、私たちを野口のいう「整体」（滞りのないからだ）へと近づけることの意義を考察した。

おわりに、野口晴哉の思想が「主体的なからだ」を復興させる道を私たちに開いている、という結論を導き出し、まとめとした。